

## 1

さつき施設に到着したときは、驚いた。吹き抜けのエントランス。大理石を基調とした待合室には革張りのソファ。ちよつとしたリゾートホテルのようだ。これまでの人生で足を踏み入れたことがない場所。ほんの一瞬、自分が置かれた立場を忘れて、心がときめいた。だけど、ここが終の住処になるのかと思つた途端、急に胃の辺りが重くなった。

こざっぱりした身なりの男性が近づいてくる。歳の頃は六十前後といったところ。素早く彼の指を見る。正確には爪を。素肌タイプの極薄グローブをはめているらしく爪は見えない。もちろん三森（みもり）も同じようにグローブをはめている。街中でも大方の人がそうしているけれど、隠したいものは人によって異なる。三森は爪に浮かんだ白い雪の結晶を、大多数は青い雪の結晶を隠すために。視線に気づいた男が、「気にされる方が多いもので」とつぶやき、気を取り直したように「成島三森（なるしまみもり）さんですね」と言った。すでにエントランスで、パーソナルAIによる認証は済ませている。「はい」と三森が立ち上がると、「管理人をしております、如月（きさらぎ）と申します。まずは入居者さまへのご説明をさせていただきますのでこちらへ」と彼は微笑んだ。

如月の後ろについて長い廊下を歩く。バロックっぽいアーチ型天井や不必要なほど幅のある廊下を見ながら、贅沢さは無駄なスペースに直結している、などとつまらない考えが湧いてくる。ふと、つい先日まで暮らしていた1DKが思い浮かんだ。もう帰ることはないんだと思うと、鼻の奥がツンとした。途中、エレベーターホールを通り過ぎたとき、ちょうどドアが開き、男が出てきた。

「こちらが成島三森さんです。今から入居者説明ですから、またお声がけします」と如月が男に声をかける。

如月に軽くうなずいてみせたあと、男は三森をまともに見た。浅黒い肌と臉にかかるほど長い黒髪。三白眼のせいか妙に目力がある。端正な顔にいくつ

のほくろが散っていて、それがほのかな色気を添えている。同性としてちょっと嫉妬してしまうタイプの男。歳はそう変わらなさそうだと当たりをつける。白シャツに黒のニットベスト、黒のパンツといたいでたちがどこかクラシックで、妙に背景に馴染んでいた。

「高守真紘（たかもりまひろ）です」

彼は、そう名乗ると軽く頭を下げた。ああ、どうも、と口の中で答えながら、なぜか三森は目の前の男を苦手だと感じていた。

管理人室に入ると、鬱蒼とした森の風景が広がっていて驚いた。

「入室すると同時にキュウブにログインするよう設定しています」

如月がすぐに種明かしをする。キュウブとは世界ナンバーワンのシェアを誇る仮想空間プラットフォームのことだ。ようするに部屋に入ると同時に、仮想空間に入る設定ということらしい。

「入居者のみなさまも同様にお好きな空間を設定することが可能です。毎朝ご来光を拝めるよう富士山頂を設定する方もいれば、住み慣れたご自宅を設定する方もいらっしゃいます」

木漏れ日が当たっている場所に、木のテーブルと椅子がある。足首が隠れるほどの草を踏み分け進む。足裏に土や枯れ葉を踏む感触があるし、土臭い匂いもする。木漏れ日が当たれば暖かく感じる。この繊細な感覚。さまざまあるキュウブのプランの中でも、ハイグレードな仕様だ。キュウブへのログインは、基本登録だけで可能だが、プランによってまるで臨場感が違う。薄給の三森ではどうても手が出なかつたグレード。世の中には手が届かないものがある。いある。勧められて椅子に腰かけながら思う。

「説明に入る前に、バイタルチェックと簡易なメンタルチェックを行います」  
向かいの椅子にすわった如月はそう言って、しばらく空間を凝視する。おそらく彼の視界には、バイタルなど三森のパersonalデータの数値が表示されているのだろう。もちろん三森も表示をオンにすれば見られるけれども、7N（セブンナイン）の診断を受けてからは非表示で通っていた。

「問題ないかと思えます。その日のコンディションによって、入居者説明を延期する場合がありますので」如月は柔和な表情ながら淡々と話す。「すでにご

存知のことが多いと思いますが、確認も兼ねてご説明します。事実誤認を避けるため直截にお伝えしますけれども、聞くのがつらくなったら遠慮なくおっしゃってください」

三森はこくりとうなずく。ここに来るまでに、さまざまな説明と怒涛のような手続きに翻弄されて、家族や友達との最後の時間も呆然としたまま過ぎてしまった。今でもまだ頭も心も追いついていない。

「この施設は、ほぼ100パーセントの確率でSnow Crystal（スノウクリスタル）の発症が予測される方、いわゆる7Nの方のみ入居できます」

Snow Crystalとは、現代に発生した奇病だ。感染すると、爪に雪の結晶のような模様が浮かぶことからそう名付けられた。発症すると激烈な痛みに襲われて死に至る。Snow Crystalが世に出始めた頃、街中で突然発症する事例が相次いだ。そのあまりに凄惨な苦しみようから、目撃した人がのちにPTSDを発症した例もある。ただちに隔離政策がとられたのだが、最初は爪に雪の結晶が浮かぶだけで誰彼構わず隔離された。ほどなくして発症すると結晶が赤く変色すること、結晶が青く変色した場合には発症しないことがわかってきた。そうなると、爪に雪の結晶があらわれた人すべてを隔離するのは不適切だという世論が巻き起こった。

Snow Crystal が日本で出始めたとき三森は二十三歳で、働き出してから一年が経とうとしていた。ニュースを見て、ふいにパラレルワールドに迷い込んでしまったみたいな気がした。あれから五年経った今でも、ときどき同じような気持ちになる。宇宙のどこかではSnow Crystalなんてない世界が存在していて、もう一人の三森が生きている、そんな気が。

「ほんとに発症するんでしょうか」  
ずっと誰にも聞けなかった問いが、口を突いて出た。聞いてすぐに後悔する。

『発症する』とHorizon（ホライズン）に診断された時点で、三森の運命は決まっている。

「ご存知のようにHorizonの診断精度は7N、つまり99・99999パーセントです。ですから、ほぼ100パーセント発症するというお答えになります」

如月は沈痛な面持ちで、三森を見つめる。余命診断に特化したAIである Horizon は、これまで臨床の場で数々の実績を積んできた。アップグレードするたびに診断精度は向上して、今では如月の言った通り99・999999パーセントの精度を誇る。7Nとは、9が7つ並ぶという意味だ。転じて、『発症する』と Horizon に診断された人のことも7Nと呼ぶようになった。絶望的な状況に立たされると頭では理解できる。できるけれども薄皮一枚分くらいは、他人事のような気がしている。7Nと診断されてからずっとそれが続いていて、周囲が大きさに嘆き悲しんだりすると、かえって困惑する有様だった。

「ただ急性型か慢性型によって潜伏期間は異なります。三森さんの爪の結晶はまだどちらとも判断ができない角板状結晶の状態です」

目の前に、六角形の雪の結晶のフォログラムが浮かぶ。

「ここから日々、結晶が成長していきます。一般的には、扇状結晶、樹枝状結晶という経過をたどります」

如月の説明に従って、フォログラムの結晶の形が変わる。

「樹枝状結晶からさらに成長する段階で、個人差があらわれ、それによって急性型か慢性型かを判断します。ただ形状はさまざまあり、人間の目で見分けるのは極めて困難です」

「じゃあ、どうするんですか？」

「常時メディカルAIが結晶をモニターしていて、診断がついた時点で告知することになっています。急性型は診断後六ヶ月以内に、慢性型は三年以内に発病するとされています」

そんな、とつぶやいたきり、後が続かない。死ぬまで生きるしかない、ずっとそう思っていた。毎日の繰り返しに倦んで、それでも死ぬまで生きるしかない。だけど。

いつの間にか、木漏れ日の位置が変わっていた。木漏れ日に照らされた下草の鮮やかな緑。風に揺れる名も知らぬ花。遠くから聞こえる鳥の声。あまりにも穏やかすぎる光景を見るうちに、視界がかすかに滲む。

「施設では一人につき一部屋が提供され、基本的にその中で暮らしていただきます」

如月の声がどこか遠い。頭がぼんやりして、なんだか体がふわふわする。

「次にピアサポーターについてですが、三森さんは聞いたことがあるでしょうか？」

三森はかろうじて首を横に振る。

「仲間同士で支え合うことをピアサポーターといいます。病気の方や障がいのある方、犯罪被害を受けた方などが、当事者同士で支え合う仕組みですね。三森さんのピアサポーターはさきほどご紹介した真紘さんです」

さきほどの無表情な男の顔が脳裏に浮かんだ。ではあの男も7Nなのだ。

「ピアサポーターは慢性型の7Nの方が担当されることになっています。真紘さんといういろいろお話されるといいですよ」如月はそこで息を一つ吐き、「最後に Eternal Sleep（エターナルスリープ）についてお話しします」と言った。

三森は頭をガツンと殴られた気がした。Eternal Sleep とは、いわゆる『永遠の眠りにつく権利』のことだ。その昔、安楽死と呼ばれていた時代があり、それが死を選択する権利に変わり、今では永遠の眠りにつく権利、あるいは Eternal Sleep と呼ばれるようになった。Horizon の余命診断が定着するにつれて、権利を行使する人が増えた過去がある。

Snow Crystal は、AI の解析力をもってしても、いまだに治療法はおろか対症療法すら見つかっていない死病だ。感染経路についても、これまでになかった新たな経路の可能性を示唆するだけで特定には至っていない。ただ一度青変するとふたたび感染しないこともわかっている。この五年の間に、大多数の人間がキャリアになり青変した。その中で政府は、一つの選択をした。それは Horizon により、Snow Crystal を発症すると診断された人に対して、Eternal Sleep を適用することだった。急性型の場合、診断後六ヶ月以内に発病すること、発症すればほぼ100パーセント死亡すること、発症すると現在の緩和ケアではカバーできない痛みがあることなど、Eternal Sleep の要件に合致するというのが理由だ。

三森は、以前から Eternal Sleep に賛成していた。表立って言いはしなないけれど、心の中では苦しまないで死を選べる方法があつてよかったと思つている。自殺願望があるとかではなくて、いざというときに完全に安楽に死ねる方

法がある事実にあ堵していたのだ。だから7NにEternal Sleepを適用すると聞いたときも、それでいいと密かに思っていた。三森にとって苦しみながら死ぬことが一番の恐怖だったから。

「三森さん、大丈夫ですか？」

気がつくのと、如月が三森の顔を覗き込んでいた。ああ、はい、と答える声が掠れていた。

「話を続けても？　もしご気分が悪いようでしたら」

いえ、と如月の言葉をさえぎる。窺うような如月の視線が、三森にはただ鬱陶しかった。

「では続けますが、Eternal Sleepの行使を希望される場合は、パーソナルAI経由で申請が可能です。慢性型の場合はケースバイケースですが、急性型の場合は迅速に行使の認可が下ります」

如月の言葉が右耳から左耳へと抜けていく。なにかご質問はあるでしょうか、と問われて、いえ、と口の中で答える。

「それでは、このあと真紘さんに引き継ぎます」

如月の声のトーンが少し上がる。ようやく重責から解放された、とでもいわんばかりに。

## 2

真紘に案内された部屋は、3LDKのオーシャンビュー。リビングの窓から海が臨める。おお、と言ってから、ここに来る道すがら見た景色との落差に困惑する。確かに海らしきものはあったが、三森が見たのはコンテナターミナルに立ち並ぶガントクレーンとそれにお似合いの濼んだ海だった。

「窓に景色を投影してるんだけど、気に入らなかったですか」

三森の困惑を見てとったのか、無表情のまま真紘が言った。

「あ、なるほど」

答えながら周囲を見渡す。白を基調にしたリビング。フローリングに幾何学模様のベージュのカーペットが敷かれている。その上にL字型ソファとガラス製の丸いテーブル、二脚の椅子。クッションはブルー系で統一されている。「キュウブ？」思わず三森がつぶやくと、「いや、部屋の中は本物です、キュ

ウブにログインするとバーチャルだけに飲み食いがちよつと大変なので。あ、キッチンお借りします」と真紘は言い、奥に姿を消した。

なるほど、と口の中で答えて、三森は窓に近づく。動くとともに、景色の見え方も変わる。埠頭の一部が視界に入るほかは、海と空しか見えない。海の傍に建っていて、しかもかなり高層からでないところの景色にはならない。前に動画で紹介されていたハワイのリゾートマンションの最上階から見た景色がちょうどこんなふうで、こんなところに住める人種とはいったいどんなだろうとずっと思っていた。

「投影をやめることもできませんが」

背後から真紘の声がして振り向くと、彼は手にしたカップをテーブルに置いていた。いえ、と答えながら、彼の爪に目を走らす。真紘の爪には、白い結晶が浮かんでいた。

「ああ」視線に気付いたのか、彼は自分の爪を見る。「三森さんは、自分以外の7Nに会うのは初めてですか？」

「初めてです」

そうですか、と真紘は言い、仕草でソファをすすめる。真紘も椅子に腰かけた。

「僕はこれまで何人かの7Nに会ったことがあります」

「ピアサポーターだから」

「それもあります、実は近親者に発病者がいて。当時、一緒に暮らしていた伯父ですけれど、流行初期に発病したので、まだ7Nという言葉もありませんでしたが。僕は発病の瞬間をこの目で見たんです」

真紘の眉間に皺が刻まれる。彼はぎゅっと目を閉じてから、大きく目を見開き、何度か瞬きした。そのまま視線を落として一点を見つめる。

「予備知識がなかったもので、ものすごい衝撃でした。本当にあれにはゾツとします。一瞬前までいつも通りなのに突然」パツと顔を上げて「すみません、怖がらせるつもりでは」と真紘が謝罪する。

平気だと伝えながら、三森は真紘の印象が変わっていくのを感じる。笑顔がないから苦手だと思ったただけであって、こうやって話していると彼の人が透けて見える気がした。

「とにかく発病すると急速に病状が進行してしまいます。伯父が発病した当時、Eternal Sleep は適用外だったのですが、現在は7Nと診断された段階で適用できるように法改正されました。だいぶん批判的な意見も多かったのですけれど」

三森にも記憶があった。『治る』可能性に目を向けさせず、7Nを早期にEternal Sleep に誘導することにもなりかねないとメディアが報じていた。

「そうでしたね。実をいうと俺は賛成派だったんですけど、なにか口に出せない雰囲気でした」

初めて人に話した、それだけのことで三森は少し落ち着かない気分になる。

「無理もないんですけどね。7Nの場合、それまでのHorizonの余命診断とは根本的に異なる点があります。余命診断が発病後にどのくらいの余命があるか診断するものであるのに対して、7Nは発病する可能性についての診断です。発病していない人にEternal Sleepを適用すべきなのか、そこが論点になりました。あれほど激的な症状がなければ、適用されなかったでしょう」

実際、三森も自分がキャリアになるまで、ほとんど忘れかけていた。最初は神経質なほど薄桃色の自分の爪を見つめて、結晶があらわれるのは今日か明日かと思い悩んだものだったが、たとえキャリアになっても大方の人間は青変するし、青変すればふたたびキャリアになることはほぼないとわかってきた頃から急激に不安が減っていった。むしろ早くキャリアになって、青変して安心したいとさえ思ったほどだ。

「7NとしてEternal Sleepを初めて行使した人を知っていますか？」

いきなり真紘が三森のほうを向いた。たじろぎながらも、うなづく。彼のことはメディアが取り上げていたから、知らないわけではない。彼は二十二歳で、今の三森よりずっと若かった。メディアには、彼の微笑んだ写真と添えられた一文のみが公開されていた。

——僕は、自分らしく生きるために、この選択をしたのです。

「彼はあまりにも若かったし、メディアに取り上げられて、一種の高揚感があったんじゃないか、それが死に急ぐ結果となったんじゃないかと僕は思いません。当時は急性型や慢性型の診断ありませんでしたし」

「その人、何ヶ月で権利を行使したんですか？」



「7Nと診断されてから二ヶ月でした」

二ヶ月。三森は急に息苦しさを感じる。爪に白い結晶が浮かんだとき、三森はこれであろうやく肩の荷が下りると思った。あとは7Nと診断されなければいい。そうすればやがて青変して、このままずっと人生が続いていくはずだと。

「真紘さんは慢性型なんですよね」

「ええ、僕が慢性型と診断されたのは二年前です」真紘は思いを馳せるように、窓の外を見遣る。「なんとか今日まで生き延びましたが、いつ発病するかわからない状態というのは変わりません」

「見せてもらえませんか、爪」

一瞬のためらいののち、真紘は両手をテーブルの上に差し出した。さつき如月が見せてくれた樹枝状結晶と似た紋様ながら、真紘の爪の結晶はより複雑な形状をしていた。

「三森さんは角板状結晶の状態ですよね」

答えるかわりに、三森は両手を机の上にのせた。

「あ、左手親指に扇状結晶が出始めてますね」

真紘に言われて、左手親指を凝視する。親指の根元に見え始めている結晶の形状が、これまでの角板状結晶と異なっていた。ほかの爪にも変化がないか、一本いっぽん食い入るように爪を見る。

「樹枝状結晶になるまでは、ダイナミックに結晶の形状が変わりますが、あまり神経質にならないようにしてください」

「樹枝状結晶になるまでは、急性型か慢性型かはわからないですよね」

「そうです。樹枝状結晶がどのように成長するかをモニターしてAIが診断します。気になるようでしたら、グローブを着用してもかまいません」

「わかりました」

答えながら、なおも三森は爪を見続ける。整然とした幾何学模様が増殖した爪は、別の生物みたいに見えた。

「自室に好きな空間を設定できますが、どうしますか？」と真紘に尋ねられた。

今、彼とはオンラインで話をしている。説明を聞いているうちに、森の中のようだった管理室を思い出す。それを言うと、如月に頼まれて自分がデザインしたんだと真紘が言う。なんでも前職がキューブ関連のクリエイターだったとかで、希望があればオーダーメイドで制作しているそうだ。手順は大きく分けて二つ。まず仮想空間キューブに依頼された内容で空間を構築して、その後部屋とキューブを紐づける。ゲーミングスペースなどでよく見かけるシテムだ。ゲーミングスペースに入室すると同時にゲームの世界にログインできるのと同じように、部屋に入ると同時に仮想空間キューブにログインできるらしい。

「空間の構築は依頼者と一緒にやるので、少し時間をとらせませんが」

「俺、その方面、ぜんぜん詳しくないですよ」

「大丈夫です。体験してフィードバックをもらうのが主な目的なので」話している途中にアラーム音が鳴り、「実は今から空間の構築をするのですが、三森さん体験者としてフィードバックしてもらえませんか？」と真紘が言う。

「俺がですか？ でも依頼者がいるんですよ」

「ええ、穂積滯（ほづみみお）さんというのですが、彼女の場合は少し特殊で」「という」と

「彼女もクリエイターなので作り手側にいるんですよ。それで第三者のフィードバックが欲しいらしくて」

滯は三森より二週間ほど早くこの施設に入居したらしい。三森はまだ管理人の如月と真紘以外に会ったことがない。その興味も手伝って、三森は体験者になることをOKした。真紘から送られてきたURLから、構築中のキューブにログインする。

気がつくと、三森はスクランブル交差点の真ん中に立っていた。ちょうど歩行者信号が青になり、人が押し寄せてくる。友達と肩を並べて歩く女子やふぎけ合う男子グループ、ショルダーバッグを肩にかけた男性、肩を寄せ合うカップル、リュックを背負った外国人観光客など、迫り来る群衆はそれなりに迫力がある。ヘッドフォンをした男が、人混みを縫うように走ってくる。三森をまったく認識しないヘッドフォン男は、進路を変更せず、全速力で向かってくる。ぶつかると思ったが、彼はかげろうみたいにスイッと三森の体を通り抜ける。

た。

「ちょっと止めよう」

女の声が交差点にこだまする。その瞬間、群衆が動きを止めた。人にばかり気をとられていて気づかなかったが、この空間にはスクランブル交差点以外にもなく、だだっ広い白い空間が広がっているばかりだ。

「やっぱり、ぶつかったりするのはリアルなほうが」

若い女が交差点上に姿をあらわす。黒のタンクトップに色の褪めたデニムジャケットを羽織り、迷彩柄のカーゴパンツをはいている。それがショートボブの彼女によく似合っていた。パツンとした前髪が、意志の強そうな瞳をよりいっそう強調しているように見える。

「交差点で人をよけるの僕はわりとストレスなんだけど」続いて真紘も姿をあらわした。

「なるほど」濡が三森のほうを見る。「三森さん、どうですかね」

「えっ、俺？ 確かにぶつかるのはストレスだけど、体を通り抜けられるのも自分が幽霊になったみたいなのがして微妙かも」

「幽霊か。それもなかなか捨て難いな」濡がボソリと言う。

「自室にスクランブル交差点を出現させるんですか？」

「そうですね、なにか」

「いや、だって落ち着かないような」

切れ長の瞳が三森をじっと見つめる。

「私、人ごみの中にいると妙に安心するんですよ。誰も私のことなんか気に留めないじゃないですか、あの感じがいいんですよ。人に会うのは億劫なのに人恋しいとき、人ごみにいく。たぶん私は人ごみの中の孤独が好きなんです」  
そういえば、会社がしんどくてたまらなかったとき、退勤後になんの目的もなく繁華街にいったことがあった。人ごみにいると頭痛がする三森は、約束でもなければ繁華街に足が向かない。家に閉じこもって、一日の仕事で溜まった澱を取り除くのが三森の日常だった。そうしなければ会社にいけなくなるとわかっていたから。だけどある時期から、家に閉じこもっても自分を守れなくなっていく。それどころか一人でいると叫びたくなる衝動に駆られる。そんな自分が怖くて、繁華街に向かったのだと思う。

信号待ちの人ばかりの中、三森は人々が発する声や街の喧騒が混ざり合った不可思議なざわめきを聞いていた。普段なら雑音としか思えないそれが、妙に心地よく三森を包んだ。青信号になり、人々がいつせいに動き始める。群衆の一部となって三森も動く。楽しそうに友達と笑い合う人、隣を歩く人の肩を親しげに叩く人、腕を組んで歩くカップル。前後左右の人々が発する熱気がいつしか三森にも伝染していた。

「俺は人ごみが苦手なんだよね。だけど人ごみの中を歩いてたら、落ちてたメシタルがちよっと上向きになったことはある」

「あ、そんな感じ。私、祭り効果って呼んでます。祭りの熱気に触れたら勝手に元気になるみたいなの」

「別に僕は人ごみが好きでも嫌いでもないけど、今みたいに行動を制限されると、妙に懐かしくはなりますね」真紘が淡々とした口調で言う。

「やっぱり、リアルな体感は大事にしないと」自分に言い聞かせるみたいに滯りがうなづく。「真紘さん、私、ちよっとぶつかったりする感覚を作り込んでみます」

「じゃあ、僕は背景をやっておきます」

うなづく滯に、「あまり根を詰めないように」と真紘が声をかける。

「でも私、死ぬまでにもう一度味わいたいですよね、人々の熱気みたいな。私の人生時間あんまりないんで」

滯がニツと笑いVサインする。三森がなにか言おうとしたとき、彼女の姿が掻き消えた。

「三森さん、ひとまず今日はこんなところで。滯さんの作業が完了したらまたフィードバックをお願いするかもしれません」

「これから背景入れるんですね」

「ええ、でも指示を出すだけなんで簡単ですよ。現実の素材を引っ張ってきて、AIが作業するので。滯さんが担当する触覚の部分はまだ人間が微調整しないと難しいところがあります。触覚や嗅覚の部分で違和感があると、本物らしく感じられないので、そのあたりは繊細な作業が必要になります」

「……聞いてもいいですか？」

「どうぞ」

「濡さんって診断出てるんですか？」

「彼女は急性型です」

「そうなんですか？ 信じられないな、だってあんなにサバサバして」

「そう見えるかもしれませんが、彼女あまり寝ないで作業してるんじゃないかと思います。短期間でかなりのクオリティに仕上がってるんで」

私の人生時間あんまりないんで、と言ってVサインした濡の姿が頭をよぎる。

三森の目の前で、ヘッドフォン男が行きつ戻りし始める。濡がなにか操作しているのかもしれない。そのコミカルな動きが、やけに物悲しかった。

#### 4

「三森さんはなんとというか、感じないようにしてるみたいですね」

真紘とは、週一回の定期ミーティングがあるのだが、そのとき真紘に言われた。最初は意味がわからなかったけれど、話しているうちに、例の薄皮一枚分の他人事のことかなと思った。三森の感覚では、それは水死体ごっこと似ていた。水死体ごっこは子供の頃に発明した遊びだ。海でも川でもいい。勢いよく水中に沈んだあと、自然に任せてうつ伏せに浮かぶ。そのまま息が続く限りただ浮かんでいる。そうすると、不思議と自分の内側に静けさが満ちていく。もはや隣に誰がいようと関係ない。いくら話しかけられても答えなくていいし、怒ったからといって相手の機嫌を取ろうとしなくてもいい。なぜなら自分は死んでいるのだから。親にも兄にも言わなかったから、誰も三森が水死体だとは思わなかっただろう。それがまたよかった。

「水死体ごっこですか」

なんとなく真紘に話したら、彼はなにかを考えるようにつぶやいた。しまった、引かれると思ったが、真紘は予想外のことを口にした。

「僕の場合は、墓場ですかね」

「は？」

「生者と一線を引く方法です。僕は墓場に行くとはホッとするんですが、自分が死体になるのは思いつかなかったなあ」

妙に感心している真紘を見ながら、こいつ、変わってるなと思う。いや、お

互い7Nの立場でこんな話をしている時点で頭がイカれている。

「俺、変ですよ」

「水死体ごっこですか？ 僕も墓場だからなんとも」

「いや、感じないようにしてるってほう」

「ああ、僕もどちらかというと同じタイプなので、同じ轍を踏まないようにと思ってる」

「同じ轍？」

「揺り戻しみたいに、急にメンタルやられるときがあるんで」

ピコンと音が鳴り、あ、きた、と言って真紘が席を立つ。食事が運ばれてきたのだ。慌てて三森も後を追いかける。自分の部屋なのに、なんだかまだ慣れない。ちょうど真紘が、配膳ロボを招き入れたところだった。勝手知ったる他人の家とばかりに、配膳ロボは迷いなくダイニングテーブルを指す。配膳を真紘に任せて、三森はウォーターサーバーに水を入れに行く。

真紘に、ランチミーティングにしますか、と尋ねられたとき、一瞬、会社員に戻ったような気がした。正直、働いていたときはランチミーティングが嫌いだった。昼休憩は、三森にとって鯨の息継ぎみたいなものだったから、それが封じられた日はあやうく窒息しそうになった。だけど今は、人と食事することに少しだけ飢えている。

「今日は中華ですよ」

真紘が言う。仕切りのあるワンプレートの皿にごはん、酢豚、シュウマイ、キャベツの千切りが盛り付けてある。向かい合ってすわり、なんとなく食べ始める。酢豚にパイナップルが入っていなくてよかった。果物がおかずに混入しているのが、三森は苦手なのだ。酢豚を口に運び、噛み締める、おいしい。

「ほんとに死ぬんですかね」三森は思わず口走る。「だってこんなにご飯はおいしいし、ありえないぐらい元気だし」

真紘がキャベツを咀嚼する音が響き、やがて止んだ。

「Snow Crystal は発症するまでメディカルAIでさえ検知できないんです。それだって爪が赤変するのを捉えているわけだから、本人が赤変に気づくよりわずかに早く探知するにすぎない。発症するまで自覚症状ありません」真紘がすっと三森を見つめる。「その後、結晶はどんなふうです？」

問われて、三森は思わず爪を見る。扇状結晶は爪の上部に少し残っているだけで、おおかた樹枝状結晶へと形状が変わりつつある。

「もうすぐ樹枝状結晶に切り替わりそうです」

「わかりました、経過を見守りましょう」真紘がなにかを見定めるように三森を凝視する。「メンタル面は大丈夫でしょうか？」

大丈夫かと言われれば、薄皮一枚分のせいかな、大丈夫な部類に入る気がする。ただ、急性型か慢性型か診断されるのが怖い。今ならまだやっぱりなにかの間違いで、明日になれば7Nではなくなるのではと考えてしまう。けど何回メデイカルAIに診断結果を照会しても答えは同じ。しまいには『診断結果は最新です。もうしばらく経ってから照会してください』とメッセージが送られてくるようになった。

「メデイカルAIは常に Horizon にデータを送り続けています。なにかあればすぐに連絡があるので」

三森の考えを見透かしたように真紘が言う。なんらかのアラートがメデイカルAIから出ているのかもしれない、照会過剰、メンタル不安定とか。会社にいるときも、月一でメデイカルAIによるメンタルチェックがあった。バカ正直に回答すると、ストレス度が高いと診断されてしまう。そうなると評価に関わるから、適度に手心を加えて答える。そうやってメンタルチェックはすり抜けられても、ちょっとした体の不調はさざ波のように三森を侵食していた。ベンチャーだけに、利益を追求できない社員は不要という社風だったから、たいた利益を生み出せない三森は、いつクビを切られるかとぼんやりした不安を抱いていた。今思えばかなりのストレスだったと思う。そういえば、ここに来てから体の不調はあまり感じていないような気がする。

「俺、もしかして会社にいるときよか健康になってるかも」

三森は独り言みたいに口にする。懸命に箸を動かしている真紘は、へえ、と応じながらも、シュウマイのグリーンピース排除に余念がない。

「働くのが当たり前と思ってたし、会社にしがみつかなきやと思ってたし、生活のために仕方ないけど、でも本当は会社に拘束されている時間は無駄でつまらなかった。利益追求とかビジネスの正義みたいな振りがぎすの、やめてほしかったし」

「つまり仕事がストレスだったと」真紘は慎重にグリーンピースを皿の端っこに置く。「でも別のストレスがあるでしょう、今は」

それはそうなんだけど、と三森は口の中で答える。自分でも不思議なのが、今の三森の気持ちを占めているのは、もうがんばらなくていいし、なにもやり遂げなくていいという安堵感だった。成果主義の風土に適さない者は、ひたすら自尊心を相手に譲り渡すはめになる。そうしないとしがみつけないから。転職すればよかったのかもしれないけれど、辞めたら二度と働けなくなる気がしていた。なぜ働くのかというと食い扶持を稼ぐためで、なぜ食い扶持を稼がなきゃならないかというと、死ぬまで生きなければならぬからだ。道のは遥か遠く、未来永劫続く拷問のよう。だけど今、三森は働くことから完全に解放されている。上司から使えないやつと見下されることもなければ、同僚から憐れまれることもない。働くことと死ぬことを天秤にかけてみれば、なぜか死ぬほうが軽かった。

「脳がバグってる、たぶん」

三森はようやくそれだけ答えた。真紘は怪訝な顔をして三森を見たが、またすぐにシユウマイに目を向ける。そして「バグがなおったとき、怖いですね」と言った。

5

真紘からフィードバックを依頼されて、キューブにログインする。今回はスクランブル交差点の真ん中ではなく、信号待ちの人だかりの中に三森は立っていた。交差点のぐるりにはビルが立ち並び、そのいくつかに大型ビジョンが設置されていて、映像が流れている。三森から見えて向かって左に電車の高架、その奥にガラス張りのビルが三棟並んでいる。直線上には緑豊かな大きな木が一本あり、その向こうに広場らしき空間が広がっていた。道路上にトラックや一般車両が走っていて、街としての機能を完全に備えているように見えた。そのうちに歩行者信号が青になり、人々が交差点になだれ込む。三森も人に押されるようにして歩き出す。ときおり人に接触するのだが、衣服の上から接触する、あの微妙な感触がうまく再現されている。交差点の途中で、人々の間を縫うようにして向かってくるヘッドフォン男が目に入った。どうするのかと



思いきや、ヘッドフォン男は三森をすんでのところで避けようとして、肩と肩が当たる。三森は見事に弾き飛ばされて路上に尻餅をつく。

「ストロップ」

溻の声が響き、三森以外のすべてが止まる。

「ごめん、三森さん、数値ミスって当たりが強くなっちゃった」両手で拝みながら溻があらわれた。

「ラグビー選手にタックルされたのかと思ったよ」

ククツという笑い声とともに真紘も姿をあらわす。

「気持ちよくふっとんでましたね」

「笑い事じゃないからね」

「いや、つい」

三森は、口元が緩んだままの真紘をつくづく見る。そういえば彼が笑うのを初めて見た気がする。溻も目を丸くしているところを見ると、レアケースなのだろう、たぶん。二人の視線に気づいたのか、素早く真顔になった真紘が、「どうでした？」と三森に尋ねる。「そうだなあ」と応じながら、三森は自分の体験を探る。ヘッドフォン男はさておき、視覚的には本物と見分けがつかないし、音響も上々、人と接触する感触もリアルだ。だけど、なにか違和感がある。そう伝えると、違和感について詳しく聞かせてほしいと溻が真剣な眼差しをした。

「前に溻さん、祭り効果って言ってたでしょ。あれがないのかな。熱気が伝染する感じが」

溻がはーっとため息を吐き、「だって生きてないもん、この子たち」と静止した人々のほうを見た。

厳密に言えば、キュウブ内では三森だって生身の体ではない。作り物の寄せ集まりに、熱気などという捉えどころのないものを求めるのは無理があるような気がした。

「結局は主観なのだから、体験者の神経伝達物質などの生化学的変化を操作するしかないのでは」熟考していた真紘が口を開いた。

「えっ、そんなことできる？」びっくりして三森が言うと、「ある種の薬を投与すれば可能じゃないですかね。あまり現実的ではありませんが」と真紘が答

えた。

「危険ドラッグとか？」

「違いますよ。メディカルAIが処方できる範囲の薬のことです」

そういえば、入居者の状況によってメディカルAIが向精神薬などを処方してくれると前に聞いた。

「ううむ。バーチャルの限界かなあ」 濤がぼやいた。

ふたたび動き出した人々の間を三人並んで歩く。人ごみの中、並んで歩くのはけっこう大変で、三森は彼らの後ろに退いて向かってくる人をよけて歩く。いつもこうしてたよなと変な感慨が湧く。歩行者信号が点滅して人々が小走りになる。それに合わせて三人も走る。待ち合わせの定番である広場を抜けていく途中、あの有名な犬の銅像がアザラシになっているのを見て笑った。濤によるとアザラシが好きすぎるのだそうだ。空いているベンチを見つけて腰をおろす。大型ビジョンには、どこかで見たことのある男性アイドルが映っていて、これでもかと指ハートを送る。濤が、「私の推し、かっこいい」とうっとりする。

「私、感謝してるんですよ。ここを構築している間は現実のこと忘れられるから。ほんと今でもなんで私がつて思うんですよね。7Nのニュースを聞いてもどこか他人事だったし、人が死んでるってわかってても、ああ、そうなんだって思うだけで。自分だけは避けて通れるっていう万能感、あれなんじゃないかね」

「俺も同じ。今でもちよっと信じられないぐらいで。診断されたときはガンツで頭殴られたみたいだったけど、別に体もしんどくないし、もう出勤しなくていいんだって正直ホッとしてる」

話しながら、三森は不思議な気がしていた。こうやって腹を割って話したのはいつ以来だろう。会社にいた頃は、常にドス黒い怒りみたいなものが腹の中に渦巻いていた。それを吐き出す方法もなく、ただ自分を閉じて身を守ろうとした日々。どうしてあんなに頑なに誰にも助けを求めようとしなかったんだろう。

大型ビジョンの映像が、ミュージック・ビデオに切り替わる。ガールクラッシュユナアイドルが、色とりどりに染めた髪を振り乱して踊っている。

「あ、消すの忘れてた」漣が不機嫌な顔になる。「好きなグループだったけど、この新曲最低ですよね」

パツと聴いただけではわからなくて、三森は耳を澄ませます。映像が彼女たちの爪のアップを次々に映す。爪に白い結晶が浮かび、それが青くなり、また白くなり、最後にレインボーカラーになる。それを見て、少し前にメディアで話題になっていたことを思い出した。

「なんですか？ これは」まったくピンときてなさそうな顔で真紘が言う。

「結晶の色なんか気にするな。逆に楽しんでいけ、みたいな歌詞なんですよ。今、グローブ着用するのがエチケットみたいになってるじゃないですか。まだ結晶が出てない人や白い結晶の人への差別を避けるために着用してるって状態でしょ。けどもういいじゃん、そんなの、おしゃれしようよ、みたいな」多くの人が青変して自分には害が及ばないと認識した今、Snow Crystalも7Nも、過去へと押しやられつつある。実際に会社ではグローブを着用しない社員も増えていたし、結晶をブリーチして白くした女子社員までいた。その話をすると、「あ、それなんかで見た。雪の結晶は白いほうがかわいいとか言ってる、ブリーチするのが流行ってるんでしょ？」と漣が眉を吊り上げた。

「なんでわざわざ白くするんです？」真紘の眉間に皺が寄る。

「だから！ ただのおしゃれだって。青に飽きたから白にする、それも飽きたらレインボーカラー」漣は強い調子で言い放ったあと少し黙り、「寝る前にも思うんだ、起きたら青変してるっていいなって。青変した夢を見たこともある。目が覚めて全部夢だったってわかったとき、私マジで泣いたよ」と絞り出すように言った。

かける言葉がなくて黙り込む。ざわめきが三人の間に満ちていく。

「ね、スクランブル交差点を上空から見られるようにしたらどうかな」ふいに漣が言う。

「確か現実のスクランブル交差点でも、ビルに定点カメラあるよね。あんなかんじ？」三森が応じる。

「そうそう、まさにあれ」漣が親指を立てる。

そのときサイレンが鳴り響き、周囲が赤く点滅し始めた。続いて『発症を検出、発症を検出、強制的にログアウトします』とアナウンスが流れた。三森は

頭がついていかずに呆然とする。真紘が「対象者は」と声を上げた。

『識別番号503126AC、穂積滯』

滯の顔が恐怖に歪む。みるみる涙の膜が盛り上がり、今にもこぼれ落ちそうになるのを三森は見た。次の瞬間、滯の姿が掻き消えた。

6

眠りが浅くて、三森は途切れ途切れの夢を見ていた。目覚める前に見た夢で、幼い女の子を横抱きしていた。浴衣姿で、ぼつんとした前髪のおかっぱ頭の女の子だった。その子が急にひきつけを起こした。あまりに激しい痙攣のせいで、妙な具合に腕がねじれ、ついには肘がありえないほうへと振り切れた。骨が皮を突き破り、血と肉片が四方に飛び散る。三森は叫び声を上げる。女の子を投げ捨てたいのに、なぜかできない。そのうち女の子の体が溶け始めたことに気づく。浴衣の袖から、お粥状になってポトリポトリと垂れ落ちる。少女の髪がズルリと剥け、三森の腕に付着する。ぬるべたりとした感触に、絶叫がほとばしる。

それで目が覚めた。ベッドに起き上がる。背中の一部が異様なほど冷えている。皮膚じゃない、もつと奥の奥、背骨がきんと凍っているような。これまでに経験したことがない類の冷えた。いや、違う。死に水を取らせるときに触れた祖母の頬も、同様に冷え固まっていた。あるとき手にしていたガーゼを取り落とした。人に触れたときの温かさを完全に裏切る死人そのものの冷たさ。悪寒が走る。まさかと思う。爪を見る。暗くて見えない。電気をつけてと言おうとしたが、声が出ない。這いずるように、スイッチのある場所にたどりつき、力任せにスイッチのあたりを叩いた。灯りがともる。爪が赤くなっているように見えて、驚愕する。まひろ、まひろと声にならない叫びを上げながら、コールを押す。これを押せば来ると彼が言っていた。

血相を変えて部屋に飛び込んできた真紘が、「どうしました」と言う。「爪が、爪が」と訴える。真紘が、床に座り込み震えている三森の手をつかみ、つぶさに観察する。

「なんともなっていないですよ」三森を見つめて、真紘が言う。

「嘘だ、色が濃くなってる」

「蛍光灯に切り替えて」

あらぬほうを向いて真紘が言い、部屋の明かりが白っぽい光に満たされる。

「暖色系の灯りだったから濃くなってるみたいに見えただけで、ほら」

彼に言われて爪を見ると、確かに結晶は白かった。違った、発症してなかったと思うのに、震えが止まらない。

「三森さん、もしかして診断が下りたんでは？ 違いますか？」

「急性型だって」三森は震え声でなんとかそれだけ言う。それは突然知らされた。なんの脈らくもなく、あなたは急性型です、と。ああ、とつぶやいた真紘がそつと三森を抱きかかえ、背中をさする。彼の手の温もりが、背中からじんわりと伝わる。「大丈夫、大丈夫」と耳元で静かに繰り返される彼の声を聞きながら、三森は泣いていた。

ソファに身を沈めた三森は、泣き疲れたあとの気だるさを持って余っていた。そこへ真紘がハチミツ湯を運んでくる。口に含むと、素朴な甘みがあった。

「恥ずかしいとこ見せちゃって」カップを弄びながら三森は小さな声で言う。

「そんなこと。誰でもあるものだから」

「濡さんのこと聞いてもいい？」

濡が Snow Crystal を発症して亡くなったことは聞いていた。だけど、最後まで一緒にいた者として、もう少し状況を知りたかった。

「いや、でも」真紘は言い淀み、「今話しても大丈夫ですか？」と不安げな顔をする。

「うん、もう落ち着いたから」

「濡さんがログアウトしたあと、すぐに部屋に駆けつけたんです。でも、僕のことかわかったかどうか」真紘が苦しげに唇をかんだ。「発症した場合、行う処置は一つだけです。隣接する施設に運び、速やかに Eternal Sleep を行う。ただその間も患者は苦しみます。濡さんはわりと早い段階で失神したので……」

熱い塊が食道をせり上がってくるのを感じて、三森はトイレに駆け込み、吐いた。背後から「大丈夫ですか」と真紘の声がしたので、向こうへいけと手で示す。胃液まで吐いたあと、うがいをしてリビングに戻った。

「すいません、話すべきではなかった」立ち尽くしていた真紘が、ポツリと言った。

「今話さないで、いつ話すんだよ」知らず知らずのうちに感情が激して、真紘を責める口調になる。「そうじゃなきゃ、自分がどうすべきかも決められないじゃないか」

真紘がハツとした表情をする。

「三森さん、まさか」

「なんでなにも言わないんだよ」

「僕になにを言えと？」真紘の声が上ずる。

「あんたはさんざん発症した人間を見てきたんじゃないのかよ。だったら手遅れになる前に早く Eternal Sleep やれって言えよ」

大声で叫び、三森はソファに突っ伏す。自分では平気だと思っていたのに、ぜんぜん平気じゃなかった。またあの寒気が襲いかかり、三森は全身を震わす。やたらと湧いてくる涙だけがやけに熱い。いきなり強い力で肩をつかまれる。反射的に視線を上げると、真紘の顔が間近にあった。彼の瞳が発する燃え立つ激情が、三森を射抜いた。

「なぜ僕がそんなことを言えるっていうんです？ あなたにだって誰にだって僕からそんなことを言えはしない。それを決められるのは、本人だけだ。違いますか？」

激しく肩を揺さぶられて、三森は獣じみた叫びを上げた。全身の力を両肩に込めて、彼の手を退ける。その勢いのまま、真紘を床に引き倒して馬乗りになり、胸ぐらをつかむ。睨みつけてくる真紘を見ているうちに、ひどい憎しみにとらわれる。この目の前の男を最大限に苦しめる言葉はなにかと脳がわななく。

「濡さんにも同じこと言えんの？ 苦しんで死んだのは自分で選んだ道だつて」

「やめてください、僕が言いたいのはそのようなことじゃない」真紘が苦しげな顔をする。

「苦しむことがわかってるのに、それを見て見ぬふりしたんだ、あんたは」頭のどこかでは筋違いなことを言っていると思うのに、ぬらぬらとしたどす黒

い情動に支配されて身動きが取れない。

「どうしてほしいんです、僕に」

「教えてくれよ、なんで同じ7Nなのに、俺だけ急性型なんだよ」

「それは僕には答えられない」

涙がこぼれた。そう、誰にも答えられはしない、わかっている。ただ真紘が妬ましかった。自分よりも少しは長らえるだろうということが、とてつもなく妬ましかった。

「三森さんがもしも Eternal Sleep を望むなら僕にもサポートできることがあると思う」真紘の三白眼が食い入るように三森を見ている。「だけどあなたの意思表示がまず必要だ」

「……俺の？」

一気に力が抜けて、三森はストーンと尻を落とす。自分自身で、この生を終わらす？ そんなことが本当にできるのか。別になにかをやり遂げたわけでもないし、誇れるようななにかがあるわけでもない。取るに足らない人生。そうかもしれない。それでも、なにかあるはずだ、なにかは。三森は、ただ涙が流れるのに任せた。

## 7

ここ数日、三森は真紘とともにスクランブル交差点を完成させるべく、全神経を傾けていた。あの夜、真紘に吐き出したのがよかったのか、今のところ自暴自棄にならずに済んでいる。Eternal Sleep のことは常に頭の隅にあるが、どうするかは目標をクリアしてから考えようと思っていた。目標とは、ズバリ『祭り効果』だ。濡が望んでいたからというわけでもないけど、死ぬ前にやってみたいことを考えたなら、意外にも人々の熱気みたいなのを感じてみたくなかった。前回のフィードバックでは現実同様に見えていたスクランブル交差点も、つぶさに観察するとおかしな点が多々ある。たとえば五つある横断歩道のうち一つを渡ると中程まで来たところで、また渡る前の地点まで戻ってしまう。堂々巡りの横断歩道と二人して呼んでいる。おかしなところをフィードバックしつつ、簡単にできそうなどころは真紘にやり方を教えてもらって三森が修正した。一方、真紘は『祭り効果』に取り組んでいた。AIモデルの体温

を細かく設定するなどして改善は認められるものの、まだ熱気が伝染するレベルには至らない。

衝突した夜のことをまだ真紘と話していない。気が重いことを避けて通るのがこれまでの習性だった。ただ違うのは先延ばしにする未来がそれほどないと知っていること。だから、ちよつと話せないかと真紘に持ちかけた。真紘は二つ返事でOKして、交差点に面したビルに入っているカフェに行こうと言った。ビルに入ると、ちゃんと内装が作り込まれていて感心する。エレベーターで四階まで上がり、ラテを注文する。クリーミーなミルクなど、視覚的にはバッチリだけど、今のところはまだ無味無臭らしくて残念に思う。だったらなんでカフェなんだ、と言ったら、気分だけでも味わえるでしょうと真紘は答えた。窓際の席に陣取る。そこからはスクランブル交差点が見渡せた。人の多さからして休日の昼間をモデルにしているのだろう。三森は、信号が変わるたびにうぞうぞと人が湧いては捌け、捌けては湧くのを飽きもせず眺めていた。何度目かに人の流れが捌けたとき、思い切って真紘のほうに向き直る。

「なんかあんな感じになっちゃったけど、俺は真紘さんとぶつかり合ってたかった気がする」

「ピアサポーターは本来、専門領域に踏み込まないことになっています。どういう状況であれ、Eternal Sleep に誘導するような発言をすべきではなかった」  
「でもそれは、俺が真紘さんを詰めたからで」

「あのときの三森さんは告知を受けたばかりだった。そのことも考えず意思表示しろと迫るなんて、とんでもなかった。それにまずその前段階として話さなきゃならないこともあるというのに」

「話さなきゃならないことって？」

「7Nが限りなく100パーセントに近い確率で発症するとしても、それは絶対に100パーセントではない、ということですよ」

「それ重要なこと？」

「重要です」真紘は力強くうなづく。「100パーセントでないのなら、ほんの少しであっても生き残る可能性が残されているということですから。明日、青変する可能性もゼロではないし、近い将来、特効薬が開発されるかもしれない。Eternal Sleep を行使するのは、そういった可能性をすべて捨て去ること



です」

店の喧騒が耳に流れ込む。なにを話しているのか判然としない不思議なざわめきに、ときおり誰かの笑い声が混じる。かつては当たり前であった日常に、ふと涙腺が緩み、世界にうっすらと紗がかかる。

「でも一方で僕は、Eternal Sleep を能動的に勧めるべきだという衝動に駆られもする」

三森が身じろぎした拍子に、椅子が動いてガタンと鳴る。

「初めて話しました」真紘はテーブルの上に肘をつき、両手を固く組み合わせる。「発病に立ち会ったたび、たとえ倫理的に問題があるとしても、Eternal Sleep を勧めるべきではなかったかと思ひ悩みます。そうすればあの苦しみを取り除くことができたのではないかと。だから正直、三森さんの言葉がけっこう痛かった」

あのととき刺した刃は、確実に真紘をえぐっていたのだと三森は苦しい気持ちになる。

「あのととき俺は無性に真紘さんが憎かった。真紘さんが慢性型で俺よか長生きできるって理由で。おかしいよね、7N以外の人のほうがよっぽど長生きするのにな」

「そういうものです、人間って」

返すべき言葉が見つからず、三森は視線を落とす。その先にあった自分の爪をじっと見る。ここに初めて来たときより、複雑な紋様が浮かんでいる。それはあいもかわらず整然としており、増殖するもの特有の生命力に満ち満ちていた。

「実は僕、Eternal Sleep を申請したことがあります」

「え？」

「僕は確かに発症せずに生き延びていますが、Horizon による診断はいまだに7N。たった今発症したっておかしくない。そういう意味では三森さんと僕の立場は同じです。それにピアサポートとして関わる以上、湊さんのときと同様に発症を目撃する機会がとても多い。そのたびに伯父のことを思い出しますし、心から怖くなる」

「申請は通った？」

「それが通らなかつたんです。明確な理由は示されていませんが、おそらく僕が慢性型であることと無関係ではありません。だから僕は、誤解を恐れず言うと、あなたをうらやましいと思ったことがあります」

三森は視線を窓の外に逃した。ちょうど交差点の信号が変わったのか、うざうざと人が蠢き、三森にはそれが黒い粒々に見えた。それらが増殖して、徐々に交差点を浸潤していく。

突然、周囲が白く点滅し始めて、三森はギョツとする。

「大丈夫、ニュース速報です。7Nに関するニュースが入ったらキュウブ内でも見られるようアラートをかけているので」真紘は窓から見える大型ビジョンの一つを指さす。

香水のCMに割り込むかたちで、スーツ姿のアナウンサーがお辞儀する様子が映る。真紘がなにか操作すると、周囲の音が消え、ニュース音声のみがクリアに聞こえるようになった。

『Horizonを管理するOODコーポレーションは、Horizonのアップデートを発表しました。今回のアップデートでは、新たにSnow Crystalの慢性型の発症前の兆候データがインプットされます。これまで慢性型は三年以内に発症するとされていましたが、実際の発症時期にはばらつきがあり、予測が困難とされてきました。今後は慢性型の発症時期についての予測精度が向上すると期待されます』

「つまりどういうこと？」理解が及ばず、三森は真紘の顔を見る。

「これまでの蓄積データの中から、新たに慢性型の発症前の兆候データが検出されたのでしょうか。僕のような慢性型の発症時期がある程度予測できるということではないでしょうか」

真紘の口調には少し緊張が感じられた。

## 8

Horizonのアップデートが完了し、ほどなくして新たな診断が開始された。急性型の三森には直接関係ないことではあったけれども、どのように変わったのか興味があった。すぐに真紘に聞いてみたいと思ったのに、体調を崩したとかで、ミーティングは翌週以降に延期になった。スクランブル交差点のある

キウブにも行って見たが、真紘とは会えず、そのまま二週間が過ぎた。ついに別のピアサポーターである京子とミーティングする羽目になった。その京子が、もしかするとこのままサポートを引き継ぐかもしれないと言う。三森としては思ってもみないことで、すぐさま真紘に確かめようとしたけれども、チャットすら返ってこない。それで部屋にいつてみようと思いつ。チャイムを鳴らすとあっさりと真紘が顔を出し、どうぞと室内へ誘う。

「ごめんね、押しかけて。体調は大丈夫？」

「平気です。ミーティングできなくてすみません」

うん、と返事しながら、がらんとした室内に愕然とする。間取りは三森の部屋と同じなのに、真紘の部屋は圧倒的に物が少なかつた。ベッドと机しかなく、窓の外には実景である港湾が広がっていて、全体的に殺伐とした雰囲気漂っている。

「もしかしてミニマリスト？」

「元はそうじゃなかつたけど、ここにきてから自然に」

そう答える真紘の横顔がギクリとするほど尖っていて驚く。かなりやせたのか、顎のラインがシャープになっていて。三森は不安を覚えながら、勧められるままベッドに腰かけた。

「京子さんから、サポート変わるかもしれないって聞いたんだけど」

「あの人、すぐ先走るから。まあ、でもおそらく担当から外されると思います。本決まりになれば僕から伝えようと思っていたのですが」

「そんな突然」

「ごめんなさい」真紘は窓に歩み寄り、外に目を向ける。「実はメンタルの状態がよくありません」

「なにかあった？」

真紘が静かに三森を見る。

「実は発症の兆候があると診断されました」そう言って彼は腕を組んだ。その拍子に、Tシャツの首元から覗く鎖骨がくつきりと浮き出る。「Horizonによれば僕はあと二ヶ月で発症するそうです」

「二ヶ月って、俺とあんまり変わらないね」

「そうですね」と答えた真紘の頬がびくりと痙攣する。

急にソワソワして、装着していたグローブを剥ぎ取る。これまでグローブをつけているところを見たことがなかったから変に思う。真紘は爪を凝視している。そのうち爪を弾き出し、ついには「失礼」と言って足早に歩み去る。洗面所から水を使う音が聞こえる。いつまでもそれが止まないので、気になって様子を見に行く。真紘は、小さなブラシで懸命に爪を洗っていた。

「ね、真紘さん」驚かさないように声をかけてから、真紘に近づく。

彼はなにも答えない。尋常じゃないものを感じて、何度も呼びかける。

「わかってるんです、これが無意味であることは」真紘は手を動かし続ける。「ずっとおさまっていたんですけど、最近になってまた」

あまりに強くこすり続けたせいで、血が滲んでいる。

「真紘さん」真紘の両手首をつかみ、引き寄せる。「もういいよ、もうやめよう」

手の中で真紘の手首が暴れ出そうとするのを、全力で阻む。彼はしばらく抗っていたが、ふいに力が抜けてポトリとブラシが床に落ちた。真紘をベッドにすわらせてから、救急箱のありかを聞く。救急箱を取って戻り、タオルで彼の手を拭くと血がついた。どうすべきかわからず、ひとまず十本の指全部に絆創膏を巻くことにする。七本目を巻いたところで真紘の肩が揺れてクツクと笑い出す。「動かないで」と言いながら、三森も笑う。そうなると止まらず、二人して笑いの発作に襲われる。ひとしきり笑ったあと、ベッドに倒れ込んだ。「聞いてもいい？」三森は首だけ曲げて真紘のほうを見たが、「なんです？」と答えた彼はただ天井を見つめていた。

「強迫神経症っていうんだよね？ ああいうの」

「そうですね。ここに来たばかりのとき、ずっとブラシで爪をこすってました。この結晶さえなくなればいいと思ったんでしょね。消えるわけもないのに」

「また始まっちゃったのは、やっぱりあと二ヶ月って診断されたから？」

「それもありませんけど、どちらかというとEternal Sleepの申請が通らないことにショックを受けました。制度が現行のままだから通らないらしく、このままいくと僕は発症を待つしかありません」

二人とも黙ると、外の音がかすかに聞こえる。車両の走行音が重なり合い、

ホワイトノイズのように耳朶を打つ。

「申請するなら言ってほしかったな」

「すみません、僕は本当に怖くて。苦しみながら死ぬのが怖くて」ガバリと真紘が身を起こす。「こんな状態じゃ、とてもじゃないけどサポートなんて」三森も起き上がり、「そんなの関係なく話してくれたらよかったよ。怖いって言ってくれたらよかった」と言った。

真紘の顔がクシャリと歪み、すぼまつた目が心なしか潤んでいる。それをごまかすかのように、「そうだ、今からキュウブのスクランブル交差点にいったみませんか？」とことさら明るく真紘が言う。

「いいね」

「実は祭り効果がいいところまでできたかもしれません」

「え、ほんとに？」

真紘が首を少し傾げて、三森の顔を覗き込む。

「一つ提案があるんですが」

なにか気になる目つきをしている。それで三森は「なに？」と身を引き気味にする。

「飲んでみませんか？ 薬」

「は？」

「やっぱり生化学的変化に期待するしかなくて」真紘は立ち上がり、机の引き出しから錠剤のパッケージをいくつか取り出した。「入居した頃に処方されたのがこれ」と赤い台紙のものを示し、「最近処方されたのがこれ」と青い台紙のものを示す。

「僕の場合ですけど、この二つを飲み合わせると、けっこう効果があった」

「え、え、え、待って、そういうのってありなの？」

「なしですね」淡々と真紘が言う。

「うわー、ヤバいわ、なにやってんの真紘さん」

「元々こういう人間です」

言い捨てて、真紘がキッチンに消える。両手にミネラルウォーターのボトルを持って戻ってきたかと思うと、ボトルを机に置き、錠剤をそれぞれ取り出して口に放り入れ、水で一気に流し込んだ。ちらりと三森を見て、「三十秒後に

ログインします。飲みたければお早めに」と涼しい顔をする。腹は立つけれども、結局は飲むのだろうと三森は観念する。カウントダウンを聞きながら、三森は錠剤を二つ飲み込んだ。

気がつくとき、三森は信号待ちの人ごみの中に立っていた。思いのほか日差しがきつい。向かいにあるガラス張りのビルに日光が当たり、光が乱反射する。あまりのまぶしさに目をしばたかせる。なんとなく体が熱っぽい。六基あるビジョンからは異なる音楽や音声が垂れ流されていて、それが人々の発する声と混じり合う。群衆が動き出す気配がして、三森も歩を進める。これからどこにいくんだっけと三森はボウツとした頭でなんとか思い出そうとするけれども、なにも浮かばない。交差点の中程でヘッドフォンをした男が肩に突き当たって走り去る。ムツとしていたら、「大丈夫？」と隣を歩く男が言った。うん、と応じながら、この男は誰だったかと頭を悩ます。よく知っているような気もするし、そうじゃない気もする。

『みなさん、こんにちは、穂積滯です』

いきなり大音響が降ってくる。見上げると、六基ある大型ビジョンすべてに同じ女の子が映っている。

「お、ジャック広告」隣の男が声を上げる。

ぱつんとした前髪が印象的な女の子。確かに見覚えがある。どこかのアイドルグループの子だろうか。

『今日はみなさんに歌をお届けしたくて、やってきちゃいました』

スクランブル交差点を歩く人々が立ち止まりヒュー、ヒューと声を上げる。アップテンポなイントロが流れ始める。六基すべてが同じ映像と音楽を流すため、爆音が響き、にわかにライブ会場みたいな様相を呈す。みんなが体を揺らして踊り出す。中にはジャンプしている人もいる。隣の男はファンなのか、ときおり「みーお」と掛け声までしていて、なんだこれと思う。そのくせ脇をくすぐられたみたいなのが愉快が身の内を走る。歩行者信号が赤になっても人々の熱狂は止まず、痺れを切らしたトラックや車両がクラクションを打ち鳴らす。それを指さして、群衆が笑う。ビジョンの中の滯は、弾けるような笑顔で浮かべて、ダンスしながら軽快に歌っている。今や最高潮に達した群衆の熱気

ともエネルギーともつかないなにかが、毛穴から忍び込み、頭の中で白い光がスパークする。ラスト、決めポーズをした彼女の指先がアップになる。その爪に、白い雪の結晶が浮かんでいた。なぜか胸がぎゅっとする。あの結晶は、きつと自分にとって重要ななにかだったはず。それなのに、忘れてしまった夢みたいに捉えどころがない。

彼女の爪の結晶が、赤くなる。

『じゃあ、みんな、またねー』

ビジョンの中の滯は大きく手を振っている。やがてプツンと別の映像に切り替わった。

(了)